

序

旅は現地での体験や見聞きしたことを楽しむものと思つて来た。が、『源氏物語』を学び始めてから旅の概念が変わつた。古典の舞台となる場所やいにしへの伝承が息づく地を訪れ、実際に歩き、自らの五感を通して感じること。考えることも多い。

物語の地や史跡を訪れ古典の描写を思い浮かべると、今と昔が二重写しになることや心情や情景が体感できることがある。まれには物語の過去と現在がつながつたような不思議な感覚を得ることもあり、思わぬ発見や感動がある。日常を離れ古典の世界を逍遙することで五感が敏感になり、想像力が働いてイメージが膨らんで行くのだろう。旅によつて時空を超えると古典の味わいがさらに増していく。

社会情勢や宗教観などが変化しても、人間の喜怒哀楽は『源氏物語』のころとそれほど変わらない。世代や立場ごとに喜びや悩みがあり、人と触れ合いながら限りある命を生きていくのだ。じっくり読むたびに、紫式部の描く壮大な構想の物語と、人物の心の機微や情感などの緻密な描写に感嘆する。人物の気持ちは場面に沿つて自然に流れ、細やかな感情の変化に共感もできる。千年も前に書かれた日本文学に人生の真実を味わい、物語の奥深さに驚くとともに、感動を覚えた。そして『源氏物語』は精読に耐えうる素晴らしい作品であることが実感される。

外国の友人と日本文化の紹介などを通して様々なことを語り合ううち、日本の文化や美意識を意識するようになった。『源氏物語』を学びはじめて数年たつ頃から、この物語に描かれているのが日本の文化や美意識そのものではないかと思ひ始めた。『源氏』を学ぶほどその思いは強くなる。西洋とは大きく異なる日本文化。私が好きな古典文学

や書道、着物や華道・茶道は日本独特のものである。日本の習慣や行事の意味と成り立ち、衣食住や季節感など、文化の源流をたどっていくと平安時代に行きつくように思う。具体的には、植物・景色・空模様の名前やその表し方・感じ方、食べものや着物の色彩感覚、小さな命・生き物に向ける眼差しと生死観、そして常なるものは無いという意識など……である。貴族によって洗練され花開いた繊細優美な日本文化は、そのルーツを平安時代に発し、現在に至ると思われる。その文化の経過や洗練されていく様子は歴史書や文化史などには記されていないが、紫式部の『源氏物語』に精彩を放ち見事に体现されている。

さらにその背景を見ることによって、日本人の思想や美意識の原風景が風土にあることも実感される。広い平野や草原はないが、四方を海に囲まれ美しい風景が各地にある。温暖な土地にはきれいな水が流れ、変化にとんだ四季が巡り、農耕や樹木によって豊かな実りをもたらされる。同時に地震や台風・火山活動などの自然災害も多く、いつ何が起るかわからない風土でもある。これは今も昔も同じで、私たち日本人は良きにつけ悪きにつけこういう風土に暮らし、長い間この国で命をつないで来た民族なのだ。そうした認識の上に立つと、日本文化は風土に根差したものであることがわかる。

変化の多い風土にありながら、千年も変わらない意識や風景がある。例えば鳴滝。千年以上前からの滝の流れが現在も見られる。周辺の景色は変わっても、鳴滝が歌に詠まれ、『蜻蛉日記』に書かれ物語になり、『今昔物語集』や今様歌が生まれ、『平家物語』の文学背景に精彩を与え、リズムを生じ、読者を文学の世界に誘う。その伝統は能楽を経て、歌舞伎の「勧進帳」にまで及んで現在に至り、今も観客の想像力を大いに刺激する（「四鳴るは滝の水」参照）。日本人の私たちが辿ってきた道も今ある姿も、西洋文化とは大きく異なるのだ。それぞれの文化が異なり、それぞれの良さを知れば知るほど、風土の保存はもとより、『源氏物語』をはじめとする日本本来の文化遺産をも、大切に

後世に伝えて行きたいという思いが次第に強くなる。

第一章は、日本の古典文学に深く関わる現地の印象や、この目と心で感じたこと・後から考えたことなどを記した記録であり紀行文である。現在の場所から感じられる古典の味わいと風景を、日本文学の原風景と名付けてみた。

第二章は、日本文学の原点。私の古典学習の原点である『源氏物語』を軸に、『源氏』を学び始めて気づいたことや考えたことが、形になった文章である。学生の頃にはわからなかった古典の良さ・面白さが、今は身近になったことともうれしい。この古典文学の背景に、風土によって生まれた太古からの原風景がある。また、風土の異なるアメリカ人との交流がきっかけで、日本独特の文化のあることが分かった。

第三章は、日本と外国の文化の違いを考える契機となった日本文化の紹介である。アメリカ人との交流で、日本の文化や行事などを知りたいと聞き、微力ながら役に立ちたいと思った実践記録である。文化紹介や交流の合間にアメリカの夫人に問われたことは、「それはどういう経緯でできた行事や習慣か、始まりは何か、あなたはそれをどう思うか？」であった。日本人として個人として誠実に答えたいと思い、自分なりに調べ考えることで日本文化への思いも深まり、有意義であった。私にできることは何かと自問しながら、友人の協力を得て着付けや書道の体験講座など試み、文学の紹介も行った。日本の文化の紹介が今後も誰かの役に立つなら、幸せである。

時代を超えて長く読み継がれてきた古典は、読むたびに多くのことを教えてくれる。人生経験が豊かになれば、読み取れる内容もまた豊かになると思う。これからも長く深く学びたい。